

集英社新書ノンフィクション

ある北朝鮮 テロリストの 生と死 証言・ラングーン事件

羅鍾一著

永野慎一郎 訳



テロ事件発生直後のミャンマーの聖地・アウンサン廟の様子。

爆弾により木造の建物が粉碎されて骨格がむき出しになり、木片があたり一面に散乱している。(写真：Yonhap / アフロ)

日本語版への序

本書が日本で出版される運びとなり、大慶の至りである。本書が当初韓国で出版された際には、翻訳される以前から多くの外国メディアが関心を示してくれた。『ニューヨーク・タイムズ』は一面中央に、写真とともにこの本に関する紹介記事を書き、三面には著者のインタビュー記事を掲載し、『朝日新聞』もデジタル版にインタビュー記事を掲載した。シンガポールの『ストレイツ・タイムズ』、インドの『ビジネス・スタンダード』、およびオンライン英字紙の『ディプロマツト』も本書に関する記事を掲載した。そして、ロンドン大学やオランダのライデン大学などで講演を頼まれ、オランダの全国紙『トラウ』にインタビュー記事が掲載された。

このような海外での本書への関心と比較して、韓国国内では期待したほどの評価がなされなかった。関心を抱かれるどころか、むしろ批判の声さえ上がった。特に、以前一緒に働いていた金大中^{キム・デジュン}政権時代の同僚たち、とりわけ政党関係者からは抗議を受けたこともあった。彼らはこの本が金大中政権に対する批判だと受け止め、誤解していたのだ。

二〇一四年にラングーン事件（アウンサン廟^{びょう}爆破事件）三一周年に際し、韓国政府はアウンサン廟殉国使節の犠牲者を追慕する記念碑を建立し、ミャンマーの現地で追悼行事を行った。しかし、そのときに発表された談話は、一世代前のものを基本的に繰り返し返すだけであつた。事件発生当時、ラングーン事件に対する韓国の主たる反応はおおむね三つに分けられた。北朝鮮の蛮行を憎むもの、韓国側の多大な犠牲を悼むもの、そして安保の護持を強調するものである。それから三〇年が経^たち、記念碑が現地に建立されながらも、いまだに当時と同じことを言っているのだ。

聖書によれば、人類最初の殺人者はカインであり、被害者は弟アベルであるとされる。しかし、現実には加害者と被害者を区別できない場合が多くある。実は加害者の方が被害者意識が強く、実際に自分が被害者だと主張する場合も多い。

朝鮮半島において、南北があたかも「カインとアベル」の物語のような対立を続ける中で、犠牲になっている人々に関する話はまったく出なかつた。その間、世界は大きく変わったが、朝鮮半島では今もなお二〇世紀半ば以来の対立状況が継続しており、現在も我々の目の前で犠牲にされている人々がいる。この本の主人公である男性の場合もその一人に過ぎない。韓国では、現在もこの事件に関して陰謀論的な解釈がある。

読者諸氏に一つだけお願いしたい。まずはこの話を落ち着いて最後まで読んでいただきたい。それから本書の主人公の生と死に関して、私たちが顔を背け、忘れてしまってもよいのか、さもなければ、哀悼を捧げるとともに反省する余地もあるのではないか、判断してほしいと願うのである。

本書の日本語版の出版は特別な意味を持っている。日韓両国とも、整理すべき過去の記憶が多く残っており、特に、国家と人々との関係に関して考えるべきことがたくさんあるからである。

本書の出版にあたり、本の内容の整理など特段のご尽力をされた永野慎一郎教授と集英社新書編集部の皆様感謝の意を表したい。

二〇二一年三月

嘉泉^{カチオン}大学研究室にて

羅鍾一

韓国語版での序

私が今から語ろうとしているのは、異国ビルマ（現在のミャンマー）で死んだ一人の北朝鮮男性の生と死に関する話である。彼はカン・ミンチオルという名前で世に知られている。しかし、彼の本当の名前はカン・ヨンチオルなのである。カン・ミンチオルというのは、特別な任務を遂行する上で国家がつけた名前で、いわば非合法活動をするテロ集団や、特別な任務で活動する人々が使用している別名や作戦上の名前にあたる。北朝鮮では、特殊なテロ活動や情報関係の職務ではない普通の政務職や行政職についている人たちでさえ、本名以外の偽名を持っている場合がある。彼は偽名であるカン・ミンチオルとして活動し、その生涯を終えた。

したがって、本書では彼自身の人生のほぼ半分に相当する二五年の間使用していた偽名の、カン・ミンチオルという呼び名を使用することにする。なぜなら、彼はカン・ミンチオルとして世に知られ、人々の関心の対象となったのであり、偽名で活動していた特殊な事件の主人公であったからだ。

彼は異国ビルマの首都ラングーン（現在のヤンゴン）近郊の刑務所で死を迎えた。自由の身としてではなく、四半世紀の歳月を刑務所で暮らし、服役中にこの世を去った。彼の死に関心を持つ者は特にいなかった。死因については確認するすべはない。死後、遺体は火葬され、灰さえも残っていない。彼は病気で死んだのではなく、他に原因があるという噂もある。

公式には、彼は肝臓がんで死んだと記録されている。しかし、一緒に服役していた人たちの証言によると、彼は死ぬ直前まで健康であり、ときどきお腹が痛いという話があった程度で、深刻な病気の症状はまったく見られなかったという。そのため、彼は殺されたのだという話さえある。服役中のカン・ミンチョルは、北朝鮮政権が自分を暗殺しようとするのではないかと恐れ、そのせいであらゆることに注意し、特に食べ物には気をつけていたという証言もある。このような証言が、どの程度根拠があるのか、確認する方法はない。ともあれカン・ミンチョルは、結局あれほどこまでに夢に見た故国に帰れないまま、囚人の身分で死んだ。刑務所の受刑者たちは、カン・ミンチョルがとても結婚したがっていたと証言した。彼は長期にわたって、不治の病に苦しみながらも治療も受けられず、激しい苦痛の末に刑務所内ではなく、病院へと運ばれる車の中で人生を終えたと伝えられ

ている。

彼は終身刑囚でありながらも、いつか自由の身になって、北であれ南であれ、祖国に帰りたいと願っていた。それができなければ、どこか海外のコリアンが住んでいるところに行き、同じ血を分け合っている民族同士、母国語で話しながら、自由な生活を営み、余生を送りたいという希望を持っていた。

カン・ミンチョルは、死ぬ直前までその希望を捨てなかった。しかし、彼がそれほど渴望していた祖国は、そして同胞たちは、彼を見捨て、知らぬふりを決め込んだため、彼の夢が叶えられることはなかった。彼を悲惨な運命に追い込んだ者たち、彼が犯した犯罪に直接・間接的に責任のある立場の人たち、そして彼の苦痛に満ちた生と死に関わっていた者たちの中に、今や彼の名前さえ覚えていない人がいるかどうかも疑問である。

事態は彼が死んだ後も変わらなかった。南であれ北であれ、彼の死を哀悼するどころか、関心を寄せる人間さえもいなかった。かくして一人の男性は、独りで苦痛の果てに死んで、忘れ去られたのである。本書は、このように死んでいった一人の男性の生と死にまつわる物語である。

したがって、この本は国家による隠された犯罪の話だとも言える。カン・ミンチョルの

悲惨な運命は、考え方によっては彼が生まれる前からすでに定まっていたのかもしれない。いわゆる「ラングーン事件」とは、北朝鮮が突発的に引き起こした凶悪事件の一つに過ぎないなどと単純な見方をしてはいけない。分断後、朝鮮半島でたびたび発生した、そして現在も続いているいくつもの事件の中の一つとして位置付けるべきである。これは国を二分して争ってきた二つの政権の間で、いまだに続く対立関係の文脈の中で起こった事件なのである。

北朝鮮が全斗煥チヨンドフワン大統領の暗殺を決定した背景には一九八〇年の光州事件クァンジュがある。したがって、このラングーン事件に関する話は、一九八三年ではなく、少なくともそれより三年前、一九八〇年の朝鮮半島南部にある全羅南道光州チヨルナムドから始めなければならない。

なお、本書はある特定の国や政権、または人物を批判するためのものではない。それよりも、一人の男性の痛ましい生と孤独な死を通して、現在私たちが直面している歴史的・政治的状況と、人間として持つべきさまざまな条件を思い起こそうと意図したものである。七十余年持続している朝鮮半島の分断状況において起こった、そしてこれからも起こり得る、さらには私たちの生活の根本的土台となっている近代民族国家と呼ばれる枠組みの中で、権力と個人の関係においてあり得る、または国家権力とその国家が保護しなければな

らない国民との間で起こり得る、一般的な不条理の一例を示すものである。

本書は大きく分けて、二つの部分で構成されている。前半は主人公が直面していた歴史的状况、すなわち、彼から人間としての生の機会を奪い、悲惨な運命に押し込んだ非情な現実の背景を探る。朝鮮半島で七十余年にわたって進行してきた現実を正確に分析しなければ、カン・ミンチョルの生涯は単なる一過性の話に過ぎないとみなされ、矮小化わいしょうされてしまう恐れがある。

後半は、この主人公の個人的な人生と、彼が関わった事件に関する話である。この本を準備する過程で困ったのは、事実を再構成するための資料が少なかったことであった。特に北朝鮮側の資料はほとんどなく、恐らく今後も相当の期間は入手不可能であろう。しかし、不十分ながら若干の資料と、当時現場にいたか、あるいは事件に直接または間接的に関与した人たちの回顧録が参考になった。ビルマ政府の公式刊行物『ビルマの殉難者廟爆破事件に関する裁判』(The Judgement of the Burmese Martyr Mausoleum Bombing Case)と朴昌錫パクチャンソクの『アウンサンリポート』は、良い参考資料となった。事件当時、韓国日報の記者であった朴昌錫は、テロ現場で奇跡的に難を免れて生き残り、自らの体験を貴重な記録

として残している。

各種メディアの関連記事も参考にした。当時の駐ビルマ韓国大使館政務参事官として勤務していた宋永植ソンヨンシクによる回顧録『私の話』は、事件現場での経験を生々しく記録した貴重な資料である。事件後、駐ビルマ大使館参事官として勤務した申鳳吉シンボンキルの『時間が止まった地、ミャンマー』もこの事件を深く掘り下げて書かれた本で、大いに役に立った。張世東チャンセトの『日海財団イルヘ』は、日海財団がラングーン事件の被害者支援事業の一環として設立された経緯があり、多数の公的資料を活用しているため、大変参考になった。

二〇一三年には、ミャンマーの作家カウンテットが『アウンサン廟爆弾テロ事件』という本を刊行した。これも当時の状況を再構成する上で参考になった。それ以外には、主に韓国とビルマでこの事件に関係した方々の証言に依拠した。多くの方々が過去の記憶を思い出しながら、あるいは彼らが大切に保管している記録を参考にしながら、本書の執筆に協力してくれた。ビルマでカン・ミンチョルと公的に、あるいは刑務所生活の中で私的に関係を持った人たちも彼が事件について語った会話の内容を聞かせてくれた。しかしこれらの資料はすべて慎重に扱う必要がある。

カン・ミンチョルの刑務所生活に関しても、ビルマ政府の公安関係者で、彼と関係して

いた人たちの証言を聞いた。そして、彼と一緒に服役していた人たちにも面会して話を聞くことができた。そのうちの一人ウインティンは、アウンサンスーチーが率いるビルマの「国民民主連盟」の副代表を務めた方である。また、他の二人は裕福な事業家で、そのうちの一人、アウンティンは、カン・ミンチョルにキリスト教の教えを説き、「マタイ」という洗礼名をつけた人物である。これらの人たちによる証言は、おおむね一致したが、細かいところでは整合性に欠ける部分もあった。この点に関しては、著者が一定の基準を設けて推論しながら書いたものである。

なお、一つだけご了解をいただきたいのは、ラングーン事件当時の国名だった「ビルマ」は、一九八九年に「ミャンマー」に変わったが、この本では事件当時の国名である「ビルマ」を使用しているということである。叙述している時期を厳密に区別するのが難しいだけでなく、事件当時の記憶があまりにも強烈で、読者にはまだ「ビルマ」という国名から受けるイメージの方が強いと思うためである。ご了解を賜りたい。

服役中にカン・ミンチョルはビルマ語を学んで流暢りゅうちやうに使っていたと伝えられている。彼がビルマ語を学んだのはラングーンのインセン刑務所に収監される前の、軍の特殊刑務所にいた時であった。使役人として雑用に従事していた脱走兵出身の受刑者たちから学

んだらしい。当然、彼のビルマ語には限界があった。カン・ミンチョルは日常生活ではビルマ語を不便なく使えるようになったが、文字読解は不可能だったという。

人の記憶は、しばしば当事者本人も欺くことがある。さらに、刑務所という特殊な環境での会話の記憶をそのまま資料として活用することに対しては、常に注意しなければならぬ。たとえば、カン・ミンチョルは、服役中、自分の母親がもともとクリスチャンであり、家に聖書と十字架が隠してあったという話をしていたようだ。しかし、北朝鮮において、特殊な業務に従事する軍人の境遇で、このようなことが現実的に可能だろうか。特に、話を聞いた同僚受刑者はキリスト教信者であったので、額面通りに受け取れるかは疑問である。

その他に、北朝鮮でカン・ミンチョルと同じ組織や関連機関で働いていたが、脱北して現在韓国に住んでいる人たちの証言も参考にした。彼らが直接経験したことを詳細に教えてくれたので、状況を再構成するのに大変参考になった。この場を借りてご協力いただいたすべての方々に感謝の意を表したい。

この事件に関連した資料は、特に、北朝鮮側の資料などはほとんど公開されていない。したがって、詳細な事実に関しては誤謬ごびやうがあるかもしれない。いや当然あり得ると思う。

しかし、私は現時点で可能な限り多くの資料を収集し、それを丁寧に整理したつもりである。したがって、本書の記録は概して事実と大きく違っていないと信じている。

現在重要なことは、本書の主題に関する私たちの記憶を蘇^{よみがえ}らせることであり、主人公とその関連人物たちが経験したことが私たちに提起している問題を正しく認識することだと信じている。私なりに、同民族である一人の男性の生と死に関する記憶を蘇^{よみがえ}りたい、という意欲一つでこの作業を開始したが、意外にも周りからの共感はもちろん、理解を求めることさえも容易ではなかった。それにもかかわらずこの本を世に出そうとしているときに、出版を引き受けて下さった「チャンピ」編集部の皆様に感謝申し上げます。

二〇一三年九月

羅鍾一

目次

日本語版への序

3

韓国語版での序

6

プロローグ ビルマの聖地アウンサン廟で何が起きたか

26

第一章 南北分断の悲劇

31

同族相克の南北関係／同族間の戦争——軍事的解決ならず／
活かされない「戦争の教訓」／南北の対峙と政治的葛藤／
噛み合わない南北対話／統一に対する別の視角

第二章 光州民主化運動とラングーン事件

55

韓国の経済成長と政情不安／光州事件の真相／世界情勢の中の南と北／

光州事件——北朝鮮のチャンス／全斗煥大統領暗殺計画

第三章 「菊花作戦」と全斗煥大統領のビルマ訪問

77

計画になかったビルマ訪問／無視されたビルマ訪問の危険性の指摘／

北朝鮮の隠密な動き／北朝鮮の繰り返し返されるテロ行為／

大事件が重なる中ででのビルマ訪問準備／テロリストたちを運んだ「東建愛国号」／

テロの脅威と漠然とした憂慮／ビルマに潜入したテロリストたち／

麻痺した韓国の情報機関／大統領のビルマ訪問に「NO」と言えない官僚たち／

全斗煥大統領一行ビルマ到着／活動を開始したテロリストたち

第四章 歴史的な場所、アウンサン廟の爆破事件

113

ビルマの国立墓地アウンサン廟／旗揚げの万端の準備を終える／

アウンサン廟への爆弾設置を見抜けなかった警備体制／

生死を分けたラッパの音——全斗煥大統領は生還／

主要閣僚など二人の生命を奪った大惨劇／

ビルマの国民的聖地アウンサン廟の爆破——失敗した作戦／

ビルマ首脳部の謝罪／生死の別れ道／テロが生んだ悲劇

第五章 テロリストたちの運命

テロリストたちの帰還方法はなかった／

タクーピン村で生け捕りにされたカン・ミンチョル／

テロリストの治療に全力を尽くしたビルマ医療陣／

韓国政府も疑いを向けられる／韓国外交官のカン・ミンチョルとの対面／

北朝鮮の犯行を証明するために仕組んだスパイ作戦／

北朝鮮の失敗したときの対応策に疑念／

大事件の失敗に対する反省はどこにもない

第六章 祖国に捨てられたテロリストたち

生きようとする意欲と精神力／テロリストたちを見捨てた祖国／

国家の命令には逆らえない／消された人間／

国家命令に服従し犠牲になった若者／事件処理におけるビルマの厳格な態度／

ラングーン事件で北朝鮮は孤立を招く／

テロリストたちの裁判——死刑の判決が下される／

終身刑に減刑されたカン・ミンチョル

第七章 テロリスト、カン・ミンチョルの生と死

カン・ミンチョル、またはカン・ヨンチョル／

テロリストとして育てられた若者／殺人的な特殊部隊での訓練／

生き残ったテロリストの苦悩／北朝鮮当局に対する不信感／

心境の変化と「生への意思」／国民に死を強要すべきでない／

服役中にキリスト教に入信／余生は韓国で暮らしたい！／

二五年間の刑務所生活／祖国に対する怨恨と憧憬

第八章 生と死の狭間で苦悩したカン・ミンチヨル

故国を恋い慕う心／カン・ミンチヨル送還のための努力／
南北関係に運命を塞がれてしまったテロリスト／刑務所で死を迎える

233

エピローグ 忘れられたテロリストの死を哀悼して

249

訳者あとがき

259

参考文献

268

地図作成／MOTHER

本書では国名、地名、人名などの固有名詞は、日本で一般的に使用されている表記を踏襲した。たとえば、大韓民国を「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国を「北朝鮮」、両国合わせた領域を朝鮮半島、あるいは南北朝鮮などと表記し、人名および地名も可能な限り漢字にした。しかし、南北ともに、特に最近ではハングル文化が普及しているため、北朝鮮は言うまでもなく、韓国においても登場人物たちの漢字名を探すのに大変苦労した。羅教授の尽力で相当分は追跡できたが、それでもわからないものはカタカナ表記とした。本書の主人公であるカン・ミンチョルについても、そもそもが作戦上の偽名であることに加え、正式な漢字表記の根拠となる資料を見つけ出すことができなかったため、カタカナ表記としている。他の二人のテロ実行犯についても同様である。あらかじめご了解をいただきたい。

なお、中国では、カン・ミンチョルを姜民哲カンミンチョルと表記していることを付け加えておく。

訳者

朝鮮半島関連地図



ソウル市周辺拡大図



ラングーン事件関連地図（1983年当時）



ラングーン市街拡大図



プロローグ ビルマの聖地アウンサン廟で何が起きたか

一九八三年一〇月九日。朝は小雨が降っていたが、やがてそれも止み、湿気はあったものの天気は晴れた。気温は二五度ほど、雨期と乾期の狭間はざまにあるビルマでは典型的な天気であった。テロリストたちにとつては運命の日である。ランゲーンの国立墓地アウンサン廟（殉難者廟）を訪問する全斗煥韓国大統領の暗殺作戦を実行する日なのだ。アウンサン廟は、ビルマを訪問する国賓ならばその日程の最初に参拝するのが慣例となっていた。全斗煥大統領一行は世界を揺るがす大惨事に巻き込まれるなどとは夢にも思わず、早朝から慌ただしくランゲーンでの行事の準備に取り掛かっていた。

他方、北朝鮮から重大な使命を受け、遠い道のりをやって来たテロリストたちは、一〇月七日午前二時、アウンサン廟の屋根に上り、屋根裏へのリモコン爆弾の設置作業を終えた。しかし、リモコンのスイッチをどこから押すかという問題をめぐって意見が割れた。カン・ミンチョルは、アウンサン廟が見下ろせるシュエダゴン・パゴダの最上階からし

ようと主張したが、リーダー格のジン・モはこれに反対した。そこは観光客が多く自分たちの姿も見られやすいので、全斗煥大統領一行を乗せた車が通る道路際からの方がよいと主張したのだった。結局、リーダー格のジン・モの主張が通り、アウンサン廟から約一キロ離れた映画館付近からに決まった。運命の時間が刻々と迫っていた。

午前一〇時、ラングーン市内のインヤレーイクホテルに泊まっていた韓国側関係者と記者たちは、ビルマ側が提供した乗用車とバスに各々分乗し、アウンサン廟に向かった。これら韓国の訪問団一行は先に到着し、二列に並んで全大統領を待った。一〇時二三分頃、一行の中にいた李範錫イボムソク韓国外相は、顔見知りの記者に声をかけ、夜に会おうと言葉を交わした。これが記者と李外相が交わした最後の会話になろうとは、そのときには知る由もなかった。

一方、約束の時間が近づき、すべての準備が整ったにもかかわらず、迎賓館では出発の気配がなかった。全斗煥大統領の姿は見えず、秘書たちと随行員たちが時計を見ながら気を揉もんでいた。ビルマ外相がまだ到着していないのだ。予定では、彼は一〇時一五分には迎賓館に到着して全大統領に随行することになっていた。結局、ビルマ外相は四分遅れて到着し、そのために大統領一行は予定時間より四分遅れて、一〇時二四分に迎賓館を出発

した。この四分の差がどれほど大きな結果をもたらすことになるかは、このときには想像もできなかった。

この時刻には、テロリストたちは、全斗煥大統領の車両が通ることになっているウイザヤ映画館前で見物に来た群衆に紛れ込んで、全大統領が通過するのを待っていた。一〇時二四分、黒塗りのベンツが韓国国旗をなびかせ、白バイの警護を受けながら通過した。この車は一分後にアウンサン廟に到着したが、車に乗っていたのは大統領ではなく李啓哲イケチヨル駐ビルマ大使であった。李大使は待っていた参列者たちに、大統領はまもなく到着すると伝えた。

テロリストたちは、今しがた通過した車に全斗煥大統領が乗っていたものと考えたのかもしれない。しかし実際は、全大統領はその時点ではまだ迎賓館にいた。運命のいたずらか、先の車両があたかも全大統領が乗っている車両であるかのような錯覚を呼び起こしたのであった。そのような錯覚が生じた背景には、ちょっとした理由が隠されていた。

その日の朝、李啓哲大使は大統領に呼ばれて迎賓館に立ち寄ってから、現場のアウンサン廟に向かった。その結果として、李大使は迎賓館から出発することになったのである。さらに、李大使の車が会場に到着した時刻は、ちょうど全大統領の到着が予定されていた

一〇時二五分であった。

李大使が大統領はまもなく到着するだろうと伝えると、参列者たちが整列を始めた。その矢先に、行事の開始を知らせるラッパの音が響いた。このラッパの音が全斗煥大統領にとっては決定的な幸運をもたらす響きとなった。行事が正式に開始される前に、ラッパ手がラッパを吹くなど、普通ではあり得ないことである。なぜ大統領が到着する前にラッパ手がラッパを吹いたのかはいまだにミステリとして残っている。ラッパ手も李啓哲大使を大統領として錯覚したのだろうか。そうでなければ、誰かの計略であろうか。

このラッパの音が、テロリストたちにとって決定的な合図となった。ラッパの音が止んだ後、少し間を置いてから、リーダー格のジン・モはりモコンのスイッチを押した。突然「バンッ」というすさまじい爆発音が轟くとともに稲妻のような閃光がピカッと走り、あたり一面が猛烈な爆風に包まれた。一瞬にして現場は修羅場と化した。木造の廟の建物はあつという間に崩れ落ち、屋根も吹き飛んだ。その残骸の下敷きになり参列者たちが押しつぶされた。廟の周りの建物からは人々が狂乱状態で飛び出した。

そのとき、全斗煥大統領を乗せた車両は、まだアウンサン廟から一・五キロ離れた地点にいた。幸運にも大統領は難を逃れたのであった。先遣隊の警護員から爆発の緊急連絡を

受けた全斗煥大統領は、ただちに迎賓館に戻るよう指示し、迎賓館で緊急対策会議を開いた。

アウンサン廟の爆破によって、現場に先に到着して待機していた閣僚および政府関係者やマスコミ関係者など韓国側の一七人が亡くなり、ビルマ側も要人四人が命を落とす大惨事となった。負傷者も両国で合計四六人に達した。

これが本書が主題とする、一九八三年のいわゆる「ラングーン事件」のあらましである。